

しが国際協力親善大使レポート

むらかみ りょうこ
村上 量子さん

隊次：2016年度1次隊

職種：栄養士

派遣国：ブラジル

プロフィール

サンパウロ日伯援護協会配属。傘下施設の老人福祉施設の入居者がよりよい日々を送っていただけるように活動を行う。

国、地域、文化について

派遣国はブラジルサンパウロ州です。住居はサンパウロ市にありますが、活動は、スザノ市、サントス市、カンポス ド ジョルドン市の3都市を巡回しています。ブラジルは、日本との関わりが100年以上前からあります。サンパウロの東洋人街「リベルダージ」を中心に、海外で最大の日系人社会を持っています。1908年に最初の本格的な集団移民、「笠戸丸移民」が到着して以降、第一次世界大戦期や第二次世界大戦を経て、1950年代に日本政府の後援による移民が停止されるまでにブラジルに渡った日本人移民の子孫は5世、6世の世代になっています。

活動や生活について

わたしは日本に生まれ育ち、恵まれている環境の中にながらも物足りなさを感じていました。23歳の時カンボジアの孤児院へ赴く機会があり、そこでの子どもたちとの出会いによって、貧しさの中に輝く笑顔から本当の豊かさとは何かを考えさせられました。それから4年後、「日本は豊かな国なのか？良さは何か？」という答えを探しに、福祉施設での勤務経験を強みに日系青年ボランティアへ応募し、今年の7月から2年間サンパウロ日伯援護協会(以下、援協)へ配属されることとなりました。援協には、1986年から30名弱の日系社会ボランティアが派遣され、現在私を含め7名のボランティアが活動しています。私の活動要請内容は、本部栄養士の松永フラビアさんと共に、サントス厚生ホーム・さくらホーム・イペランジアホームのご入居者様に対し、食事を通してより良い空間を作ることです。

活動が始まり半年が経ち、日系社会に存在する福祉施設を肌で感じています。日系1世・2世の方だけでなく、非日系の方もご入居されている中で、様々な背景をもったご入居者様に対し、どの施設も日本米とブラジル米を提供していることに驚き、サントス厚生ホームでは、毎食お粥も提供しており、イペランジアホームでは、毎日施設内で採れた新鮮な

野菜を使った味噌汁が提供されています。また、さくらホームでは、月1回食事のイベントを企画していて、今回は巻き寿司づくりを行いました。みなさん手慣れた様子で作られていたことが印象深かったです。このように、入居者の方に寄り添いながら食事を提供している点は、ブラジルも日本も同じであると実感できました。職員はポルトガル語を母語として話す人が大半を占めていますが、施設内の至る所で日本を感じることができ、現地職員と歴代ボランティアの活動成果であると感じています。

一方、日本では考えられない事もいくつかありました。まず肉と鍋です。日本では最初から薄切りになった肉を使用し調理を行うことが普通ですが、ブラジルの調理場には必ず圧力鍋があり、塊で納品された肉を軟らかくして提供しています。また、筍は醤油煮や混ぜご飯として日本では食べていました、こちらではオレガノと酢を使いサラダにして食べます。そして、オレンジの皮は白い部分を残して切り、果汁を吸うようにして食べ、皮を剥く専用の機械もあることなど、同じ材料でも調理方法が違う点があり、驚きの連続でした。

日本人移住から100年以上が経ち、大きな転換期を迎えている日系社会の土台を築きあげた入居者の方々や現地の方と交流し、多くを学ぶ2年間にしたいです。



イペランジアホームでのオレンジの皮むきの様子



さくらホームでの巻き寿司作りの様子



サントス厚生ホームでの漬物作りの様子



援協本部にてうどん提供の様子



東洋人街リバルダージ。大きな鳥居が印象的です。週末は多くの人でにぎわいます